

イングリット・アーレント＝シュルテ著 野口芳子 小山真理子 訳
『魔女にされた女性たち—近世初期ドイツにおける魔女裁判』

(勁草書房、2003年6月刊)

橋 木 郁 子

(関西学院大学文学部)

本書は、当時の裁判記録をもとに魔女裁判の被害者達の実像に迫った歴史書である。文学、絵画、漫画、映画などで、現在、人気のある「魔女」という存在。しかし、現実には「魔女」にしたあげられ弁明もむなしく殺された犠牲者たちがいた。彼女たちはどのような出自の女性であったのか、そしてどのような罪状で告発されたのかを本書は明らかにする。

本書によると「魔女」という考え方自体は魔女裁判の始まる前から中世の共同体の世界観に存在していた。霊や悪霊の存在や神秘的能力を持つ女性の存在を、教育のある人間も含めて皆が信じていたのだ。ところが近世初頭、キリスト教が「魔術」を「異端」と結びつけた。その結果「魔術」はキリスト教社会を脅かす異端行為として、「魔術」にたけた女性たちは悪魔の一味として糾弾されることになる。伝承の魔女信仰にキリスト教が血肉を与えた、すなわち「妖怪が人間になった」のである。そして、当時の女性たちにとって悲劇的であったのは、「魔術」を使う男性もいたのにもかかわらず、「魔術」を操る人間が女性に固定化されたことである。そこには女性は誘惑に負けやすい、ゆえに悪魔の命令にも従いやすいという根強いキリスト教のミソジニーが伺える。

では具体的に「魔女」はどのような罪で告発されたのだろうか。詳しくは本書を読んでもらうしかないが、筆者にとって印象的だったのは「悪女」であるからという理由で「魔女」として告発された女性たちの話である。ここでいう「悪女」とは、神の秩序に従わない女性、夫の伴侶ではなく夫の主人になろうとする女性、喧嘩早くて「ガミガミ言う」女性、毒舌や呪いの言葉を発する女性の事を指す。さしずめ現代なら「カカァ天下」の主婦は全滅ということになるが、当時、女性が争いの場で相手を罵り、その相手が後日病気になったりすると「害悪魔術」をつかったかどで「魔女」として嫌疑を受ける恐れがあった。女性は善良で敬虔というキリスト教社会のジェンダー規範を転覆させた女性たちは「魔女」とみなされたのである。

著者は、最終章でマルガレーテ・ミュラーの裁判を例に取り上げ、「魔女」として告発された女性がどのような過程を経て処刑されるのかを丹念に記述している。それによると被告はまず司法官から質問を受ける。証人による聞き取り調査の後、嫌疑が正当であると判断されれば、拷問道具を見せられた上で自白するよう迫られる。それでも自白しなければ拷問を受けることになる。マルガレーテの場合、拷問をうけて魔女であることを認めたが火刑による処刑が決まると自白を撤回。報告を受けた裁判所は再度、拷問を行うことを指示する。初めのうち否認したがついに自白。懺悔を聞きに来た牧師に無実を主張するが、処刑の日時が確定してしまう。ここからが彼女のすごいところで、看守をだまして脱獄してしまうのである。マルガレーテは捕まった後も否認と自白を繰り返

し、処刑を延期させ、再度脱獄を試みるが失敗してついに処刑される。マルガレーテの裁判を最後にもってきたのは著者の巧みな構成としかいいようがない。彼女の生に対する執着、無実の罪で死んでいく無念さが、上質の小説、いやそれ以上に生々しく伝わり、読む者を圧倒する。一級の歴史書にふさわしい余韻を残すラストである。